

高瀬川だより

NPO法人京都高瀬川繁栄会会報
編集人 田村佐起三

〒六〇四 八〇三三
京都市中京区蛸薬師通河原町東入
電話 (〇七五) 二五三三・〇七〇七

『揺れる情(こころ)』通信③⑦

稲荷山武田病院院長 土屋宜之/元京都医療センター外科部長
緩和ケアとは解決策もなく、正解もなく、患者さんを喜ばす事も余りありませんが、安心を与え信頼感が生まれ、なんでも許してみようと思ってくださる「港」に成れたらいいのです。これがほんとうに難しいんです。宜長さんが診療中に感じていた喜びを今、私は感じているのではないかと体感する事があります。すごく嬉しくて宜長さんと友人に成れたと思えるんです。

宜長さんは国学の授業をしている最中でも患者さんから連絡があれば中断して往診に向かいました。医学が進歩した現代でも、厚労省は在宅癌医療を推進しています。医学が今ほど進んでいない江戸時代では、より一層在宅医療が中心にならざるをえません。在宅療養では我が家にいるという安心感が、すでに患者さんの情(こころ)の中に備わっています。ここが現代の緩和医療との大きな相違点です。江戸時代の方が現代より緩和医療がゆき届いていたのです。

『昏るに、日はのこりて』

田村佐起三

『孫の相続相談』

娘婿が胆管癌で他界。娘は義母の介護を拒否して離婚私にとつては孫にあたる長女、長男、次男が相続者となりました。

その長女が取り乱し、周りをかき回し関係者間で一時困惑が漂いました。遺産は現金、不動産、婿が経営していた会社の株券でした。

長女と長男は現金を求めた様子で、次男から相談があり私は「お父さんの形を相続すべき」と回答し又、「聞いた話の中では自宅不動産と父親会社の株券を相続されては」とアドバイスしました。

長女と長男は現金と相続した会社の株券の三分の二をその会社の社員に譲り現金化。次男は株券の三分の一と不動産を相続しました。不動産の不足分は銀行から融資にて賄い長女と長男に支払い相続は解決しました。

今後どうなるか私は「昏るに、日はのこりて」見守る所存です。

『中立』つて

常楽臺住職 今小路覚真

親鸞聖人の流れを汲み、浄土真宗の発展の礎を築くことに尽力された、わたしの祖である存覚上人が大切にされたのが「与奪」の立場でした。

相手の話を聞いたうえで、自分の意見を述べる、これが与奪の意味です。

困り事があると、かつては「お坊さんに聞いてもらって判断してもらおう」といわれた時代がありました。お坊さんは周りの人の言葉にわけへだてなく耳を傾けて、その上で判断を下されたからでした。

だからといってそのお坊さんが「中立」であるか、といえは決してそのようなことはありません。たしかに多くの人の言葉に耳を傾け、ときには首を横に振りなどをされたでしょう。しかし結果としての言葉は「中立」などではなく、そのお坊さんの信仰に裏付けられた言葉でしかありません。

「中立」とは、あやふやな立場の姿です。一人一人が自分の立場を知ること、その立場を認め合うことで、健全な社会の姿があります。

『ワインのバブルと投機』イタシヨク

福村直

近年ワイン人気の上昇にともないブランド価値のある有名ワインの価格が特に高騰しています。以前2万円程度だったものが10年で20万まで上がることも頻繁に起こります。理由のひとつとして中国などの新興国での需要が増えた事が知られています。以前にも増して利ざや目当ての投機対象となった事が大きいでしょう。

飲食物は生モノであるため先物買いを除き投機の対象になりにくいのですが、ワインは他の酒類と違い瓶内熟成が可能であり、物によって味がさらに深まる事から長期にわたり商品価値が落ちません。むしろ消費で数が減り希少性が上がるため、価格上昇につながるのです。「買っておけば必ずそれ以上の価値になる」と言う安心感から飲むためよりも、将来へ向けての投機が目的になり、ワインファンドが数多く設立されています。

健康レシピ

栄養士 國松美也子

『7月レシピ』

暑くなりトマトが美味しい季節です！トマトには、身体のサビ取り効果のあるリコピンがたっぷり！ダイエット中にもピッタリな、サッパリとしたヘルシーな簡単メニューをご紹介します！

トマトのしそポン酢漬け

材料：トマト2個を一口大か好みのサイコロに

カット。玉ねぎ1/2個をみじん切り。

大葉：3枚細切り。

ボールかタッパーにトマト、玉ねぎ、大葉を入れ、お好みのポン酢を50〜100ccほど、からまるくらい入れて半日位漬ける。そのままでもいいですが、豆腐の上ののせてもOK！

暑い夏にさっぱりお召し上がりください！

『大原流声明雑話③⑥』

實光院住職 天納玄雄

金粉を膠で溶いた顔料によって書写したものを金字経という。古くから中華文化の影響圏全域でこうした装飾経典が書写されていたようだ。

日本においても奈良時代より金字経の書写が行われたが、平安時代以降の「金字」法華経は、他国のものとは少々意味合いが異なっているようだ。清少納言も『枕草子』第一九五段に「経は法華経さらなり」と述べたように、平安時代には法華経こそが最上の経典であると世間一般では認識されていた。そうした共通認識の上に、この経典自体が仏の肉身と同等であるという信仰が加わったのである。身体が金色に輝く仏陀と、金字法華経の文字を同一視したのだ。こうした法華信仰を土壌として、前号に挙げたような種々の装飾経典が生まれたのである。